

環境学習施設の つくり方

—地域に多面的価値を創出する施設—

施設運営に関する特別編

【第2回】地域特産ならではの素材の活かし方
 廃棄物資源循環学会・環境学習施設研究部会 事務局
 鈴木 榮一



関係性構築の3段階実践事例

施設のうちま味(可能性)を引き出す秘訣は、施設の立地・周辺環境、そして地域の人材という地域の特産を活かすことにあり、施設と地域の関係性が、重要なポイントになります。

そこで、関係性構築に向けた「知ってもらおう」「来てもらう」「使ってもらおう」の三つの段階を踏むことにより、徐々に地域への出前や連携事業へ向けた機会が増え、施設として地域の特産が集まる拠点施設への成長が期待できます。

【1】「知ってもらおう」

何はともあれ、施設の場所や名前を地域の皆さんに知ってもらうために、できることは何でもやってみることでです。

具体的には、まず地域の情報誌・マスコミ等へ定期的な告知資料配付、アピール力があり地域性の高いデザインの家ホームページやブログによるネットへの情報発信、定期的に催事やプログラムを告知するニュースメールによる情報発信等。また、施設の周辺に施設内製ののぼり旗を数多く並べたり、大型の垂れ幕を出し

たりして、周辺道路を通る車両に施設の存在をアピールすることも有効な手段です。

さらに、教育委員会の協力を得て定期的に地域内の小学校全校へチラシを配布、その他、地域の公共施設や企業をまわって、ポスターを掲示してもらい、広報チラシも各施設で定期的に配架してもらう方法もあります。

地域の皆さんに、何か楽しいことを続けている施設という興味付けから始め、まずは、地域の皆さんに「知ってもらおう」こと。単純なことですが、この基本的な知名度アップをしつかりできれば、次のステップから楽になります。

【2】「来てもらう」

ある程度広報等により知名度があがったら、次は来てもらうための動機付けです。

大型催事は、環境学習とは少し離れますが、非日常的な体験を提供するプログラム(熱気球体験、コンサート、子ども向けの劇(紙芝居、操り人形、着ぐるみショー)、地域の方が興味を持ちそうなテーマの講演会等)を開催し、ごみ処理施設に馴染みのない地域の人々に来てもら

うことができます。そのついでに、施設見学や環境学習プログラムを体験していただき、その後のリピーターにもつながります。

ある程度知名度があり、地域の方々が継続的に施設に来られるようになれば、催事内容も、環境学習施設に馴染む3Rや生物多様性等の内容へと変質していきます。例えば、フリーマーケットや子ども用品のリリース、また地域の自然環境を味わう機会(森林浴、ホタル観賞等)を提供するなど、施設の立地も踏まえた催事プログラムへのシフトが望ましいです。

【3】「使ってもらおう」

施設としては、「来てもらう」で十分に目的を果たしたと言えますが、施設の持続可能な活用、地域における多面的価値の創成を目指すのであれば、施設を使ってもらうための工夫や努力が欠かせません。

紙面の都合で詳細まで紹介できませんが、地域の皆さんにとつての使い勝手の良さ(駐車場、エントランス、導線、設備配置等)、各種プログラムの予約のし易さと公平性(受付プログラム等)、アメニティの充実(空調管理、BGM、飲食サービ

2026年発行予定の「環境学習施設ガイドブック(仮称)」を見据え、「施設のうちま味(可能性)」を引き出す運営レシピ」をテーマに、環境学習施設づくりセミナーを3編に分けて提供します。

本編(第2編)では、調理法とも言うべき、地域特産ならではの素材の活かし方をご紹介します。

ス、授乳室・おむつ交換ルーム、バリアフリートイレ等）他、施設を利用者の視点で再点検し、長時間過ごせる場として使ってもらうための環境整備が必要です。

また、地域の方々が主催できそうなさまざまな催しや会合の提案を施設側から提示しても良いでしょう。それぞれの施設の設備によって可能なスポーツや市民コンサート、ドッグラン等、地域の要望に応えた提案が望ましいです。さらに進めて、これらの活動を、地域の皆さんが主体で定例的に行われるようになり、施設がまさに地域の中核拠点として役立つようになることが理想です。

地域特産の見つけ方のポイントと調理法

その地域で生まれ育った方々には、お住まいの周辺環境は、当たり前前の日常の暮らしの一部ですが、地域外から見ると、とてもユニークで貴重なものが少なからずあります。筆者は、日本一と言われる素晴らしい景観（と地域外は思う）の里山にお住まいの地域の人から、「何が日本一？どこにでもある田舎風景じゃないか」と不思議がられたことがあります。

す。

地域の特産は、地域の方自身には分かりにくいもので、極端に言えば「外からの目」で探すことで、その地域独特の売りになる特産が見つかる場合があります。人材も同様に、地域で当たり前に接しているご近所さんの中に、腕に覚えのある素人離れした名人やリタイヤされた高度な技術保持者、中には芸術家や作家が潜んでいることもあります。地域に、注目に値する人材や施設を活用していただけるリーダー的人材が埋もれている可能性もあるのです。

具体的な見つけ方としては、地域情報（地域史、周辺情報等）を図書館や資料館で得るのみならず、行政や地域団体が企画する催事に参加し特産情報を得たり、地域団体や商工会等が開催する異業種交流会等に参加し人脈を構築したり、地域の文化施設や公民館等にあいさつを繰り返して施設連携を模索したりすることにより、施設運営や環境学習プログラムに役立つ地域情報を取得する他、地域からの施設への期待や需要あるいは改善点を見出すこともできますはずです。

そして、得られた特産の情報や人材を、施設がどのように受け入れて

きるのか、また特産をどのような組み合わせにより環境学習プログラムにできるのか等、施設が持つリソースや人脈を特産とうまくマッチングさせることにより、地域の施設ならではの調理（企画を生み出すこと）が可能になります。前編（第1編）で紹介した地域企業との連携による事業展開や地域団体と企業のマッチング活動などが正にその成果と言えます。

地域特産情報をいかに調理して環境学習プログラムに昇華させるのか、ポイントは施設のリソースや人脈の豊富さ、そして運営者が日頃から広い視野で地域についての課題を感じ取り、調理の訓練に励むことにあります。柔軟な考え方やアイデア発想に役立つ研修を受けることも一助になるでしょう。

地域ならではのプログラムを調理する中で、地域の皆さんに提供すべき肝心なことは、「施設は地域の一部であって、これを活用しない手はない」と、地域の皆さんに思っていたかどうかです。美味しい料理もそれに似合う食卓が必要ないように。

おわりに（地域が主役）

施設における環境学習や地域活動の主役は、地域の皆さんです。施設運営者は、あくまで触媒としてのお手伝い役に徹し、地域の方々が主体的に施設を活用していただくように導く必要があります。運営者がリーダーシップを取り過ぎたり、お手伝いが過ぎたりすると、地域との関係性も継続が難しくなり、持続的な運営に結びつかなくなる場合もありますので、注意が必要です。

次回第3編は、「地域素材の活用レシピ紹介」の予定です。W

●連絡先●

環境学習施設研究部会

(https://www.facebook.com/facilities.env.edu.888/?locale=ja_JP)

「環境学習施設研究部会」で検索すると、(一社)廃棄物資源循環学会環境学習施設研究部会のページがでています。同部会がfacebookの「環境学習施設を考える会」も運営しています。